

映画刺激の単純性—複雑性と認知欲求が映画に 対する評価に及ぼす効果に関する研究

藤原 武 弘 ・ 神 山 貴 弥

広島大学総合科学部人間行動研究講座

The Effects of Film Stimulus Simplicity-complexity and Need for Cognition on the Evaluation of the Films

Takehiro FUJIHARA and Takaya KOHYAMA

Department of Behavioral Sciences, Faculty of Intergrated Arts and Sciences,
Hiroshima University

Abstract : The purpose of this study is to investigate the effects of the stimulus dimension of the films (simplicity-complexity) and need for cognition on the evaluation of films. Seventeen high need for cognition subjects and eighteen low need for cognition subjects watched two films. "Raiders of the lost ark" was selected as the simple stimulus film and "Die Blechtrommel" was selected as the complex stimulus one. The ANOVA of the image evaluation score revealed significant interaction effects of the stimulus simplicity-complexity and need for cognition. High need for cognition subjects evaluated the complex stimulus film higher than low need for cognition subjects. The ANOVAs of cognitive effort, the evaluative dimension of the film impression, and the evaluation of image and music scores revealed significant main effects of need for cognition. These results indicated that high need for cognition subject's cognitive effort, evaluative score of the film impression, and the evaluation of image and music were higher than low need for cognition subject's ones.

Keywords : need for cognition, stimulus simplicity and complexity, film evaluation

はじめに

本研究の目的は、映画刺激の次元の単純性—複雑性と情報処理過程の個人差変数である認知欲求が映画に対する反応や評価に及ぼす効果を明らかにしようとするものである。映画は総合芸術とも言われ、映画刺激の中には、音楽的、演劇的、物語的、絵画的な要素が含まれる。Monaco(1977)は、芸術のスペクトルを実用的、環境的、絵画的、演劇的、物語的、音楽的領域に位置づけているが、映画という芸術は、既成のスペクトルのどこかにきちんと収まるというよりは、むしろあらゆる芸術の領域にまたがっている。このことは映画刺激の中には、あらゆる要素が複雑に含まれてい

ることを示している。こうした映画刺激に対する心理学的側面については、映画刺激が複合的で複雑性が高いので、現在までほとんど研究されていない。唯一の例外としての実験的な研究をあげれば、恐怖映画における映像と音声の恐怖に及ぼす効果、ならびに恐怖映画への時系列上の生理的反応の変化を明らかにした藤原（1989）の研究ぐらいしかない。

芸術に対する嗜好の研究はかなり古くから行われている。たとえば、Eysenck(1941a)は、絵画を好みの点から順位づけを被験者に求め、その結果を因子分析にかけた結果、一般因子として、良いものを好むあるいは美の因子（T因子）、双極性の因子として、形式的芸術—代表的芸術といった美的判断の次元を見出した。また、Eysenck(1941b)は、風景画、人物画、風景写真、彫刻の写真を刺激として用い、好みの点から被験者に順位をつけさせ、因子分析を行った結果、第一因子にT因子、第二因子にK因子（明るい、現代的形式の絵を好む人々と暗い、古い形式の絵を好むものを弁別する、明るさの因子）を見出し、外向性、進歩主義の若い人々は、現代的な明るい絵や写真を好むことを明らかにしている。

また映画刺激以外の比較的単純な刺激に対する好みの心理学的な研究が古くから行われている。Eysenck(1941c)は、多義図形を刺激として嗜好の点から順位を求め、因子分析した結果、第一因子として、T因子、第二因子として複雑性—単純性の双極性因子を見出している。

Munsinger & Kessen(1964)によると、刺激図形の変動性の量とその刺激に対する好みの間に関係を見出している。一般的な被験者は中ぐらいの変動性を持った刺激を最も好むことを明らかにしている。このことは中ぐらいの認知的不確実性が好まれることを示している。更に、芸術を専攻する学生は刺激の変動性が増加するにつれて好みも増大することが、また刺激図形に接触する回数が増えるに従って、好みも増すことが明らかにされている。

芸術作品に対する嗜好における個人差を明らかにした研究として、Barron & Welsh(1952)は、芸術家は複雑で非対称的な図を、一般の人々は、単純で左右が対称的な、予測可能な図を好むことを見出している。また、Springbett(1960)は、9枚の絵を美術の正式の訓練を受けた年数の違う人々にSD法で評定を求めた結果、良い絵は複雑で、単純ではないことを見出している。

O'Hare(1976)は、絵画になじみのない学生の判断は一次元的であるのに対して、絵画専攻の学生の見方は二次元的であることを見出した。藤原・田頭（1984）は、クラシック音楽を刺激として、音楽専攻の学生は二次元的であるのに対して、音楽になじみのない学生は、一次元的であることを見出した。

ところで、映画刺激に対する人間の心理学的な側面を実証的に始めて明らかにしたのは、藤原（1989）である。藤原（1989）は、映画雑誌の選考委員の映画に対する嗜好を因子分析を用いて明らかにして、映画刺激の単純性—複雑性の因子を見出した。更に、映画を見る本数が多くなるにつれて、映画の見方が成熟し、単純な映画から複雑な映画へと嗜好は変化してゆくのではないかと指摘している。

一方、情報処理に関する個人特性の違いを示す概念として認知欲求がある。Petty & Cacioppo(1986)は、ある対象に関する情報処理が促進されるか否かは、その対象に対する情報処理能力とそれを処理しようとする動機づけによって規定されると指摘している。認知欲求とは、この情報処理をしようとする動機づけに関わる個人要因であり、「努力を要する認知活動に従事したり、それを楽しむ傾向」と定義されている。つまり、ある情報に接したときに、一般的には高認知欲求者は低認知欲求者よりもその情報をより注意深く検討する傾向がある。こうした特性を受けて、従来の研究においても、高認知欲求者は低認知欲求者より複雑な課題を、逆に低認知欲求者は単純な課題を好むことが実験的に明らかにされている（Cacioppo & Petty, 1982）。

以上のような先行研究を踏まえ、本研究では、映画刺激の次元の単純性－複雑性と情報処理過程の個人差変数である認知欲求が映画に対する反応や評価にどのような影響を及ぼすのかを明らかにしようとした。

本研究においては次のような仮説をたてた。高認知欲求者は低認知欲求者と比較して、単純な映画刺激よりも複雑な映画刺激をより高く評価するであろう。また逆に低認知欲求者は複雑な映画刺激よりも単純な映画刺激をより高く評価するであろう。

方 法

被験者：本実験に先立ち一般心理学を受講する大学生を対象として、認知欲求尺度（神山・藤原，1991）への回答を求めた。認知欲求尺度は、「あまり考えなくてもよい課題よりも、頭を使う困難な課題の方が好きだ」、「課題について必要以上に考えてしまう」、「新しい考え方を学ぶことにはあまり興味がない（逆転項目）」など計15項目から構成されている。そして、その得点から高認知欲求者（7段階評定尺度15項目の平均得点＋1SD以上）、あるいは低認知欲求者（平均得点－1SD以下）と判定された人のうち、本実験への参加を承諾した高認知欲求者17名（男子10名・女子7名、 $M=5.69$, $SD=0.20$ ）、低認知欲求者18名（男子12名・女子6名、 $M=3.01$, $SD=0.53$ ）、計35名を被験者とした。なお以下、高認知欲求者はHNC、低認知欲求者はLNCと表記する。

実験計画：認知欲求（高・低）×映画刺激の複雑性（単純・複雑）の2要因混合モデルであった。このうち認知欲求が個人間要因、映画刺激の複雑性が個人内要因であった。

映画刺激：『キネマ旬報』の映画採点表に基づき、藤原（1989）は映画のパターン分析を行っている。1981年度に日本で公開された外国映画について言えば、単純性－複雑性と解釈される軸上の最も単純性が高い位置に「レイダース・失われたアーク（1981年アメリカ制作）」が、また最も複雑性の高い位置に「ブリキの太鼓（1979年ドイツ制作）」が布置された。そこで本研究ではこの結果に従い、単純性の高い刺激として「レイダース」を、複雑性の高い刺激として「ブリキの太鼓」を使用することにした。なお上映時間は、「レイダース」が235分、「ブリキの太鼓」が262分であった。

質問紙：質問紙は、以下の2種類が用意された。

- (1)映画一般に関する質問紙（質問紙A） ①映画館で映画をみる頻度 1）“よくみる～ほとんどみない”の4件法、2）年間にみるおよその本数 ②テレビやビデオで映画をみる頻度 1）“よくみる～ほとんどみない”の4件法、2）月間にみるおよその本数 ③好きな映画のジャンル 1）アニメーション、2）サスペンス・ホラー、3）SF X、4）活劇・冒険・スペクトル、5）恋愛・青春、6）家族愛、7）喜劇、8）ミュージカル・音楽、9）戦争、10）ポルノ・アダルト、11）時代劇、12）政治・社会、13）悲劇、14）その他（複数回答） ④映画に関する関心度（7段階評定） ⑤映画に関する知識度（7段階評定） ⑥洋画・邦画の好み “洋画”、“邦画”、“どちらでもない”の3件法、⑦好きな映画（自由記述、5本まで）
- (2)実験で提示された映画に関する質問紙（質問紙B） ①映画に対する印象 Table. 1に示した26形容詞対に対するSD評定（7段階） ②映画に対する理解度と難易度（各7段階評定） ③映画をみている時の認知努力の程度 1）映画の結末について思いをめぐらした頻度、2）映画の時代背景や歴史的設定と自分の知識を照らし合わせた頻度、3）映画の主題について考えた頻度、についてそれぞれを4段階評定させた ④映画に対する認知反応 映画をみているときに思いついた考えを箇条書きで列挙させた ⑤映像と音楽に対する評価 “よい－わるい”、“効果的な－効果的でない”

い”、“美しい—美しくない”、“好き—嫌い”の4形容詞対を用いて、映像と音楽についてそれぞれ7段階でSD評定させた ⑥過去の視聴経験（ある・ないの2件法）

手続き：被験者に約2週間の実験スケジュールの中から都合のつく時間帯を選ばせ、1人につき2回に分けて実験を行った。被験者が同一時間帯に重なる場合には複数（最大で4名）で実施した。実験室には27型のモニター（SONY, KV-27HF2）とビデオテープ・レコーダー（Victor, HR-S9000）が設置されており、これを使って映画の提示を行った。またモニターの前2mと3.5mの位置に矩形の机が設置され、それぞれの机にはモニターと向かい合う位置に椅子が配置された。被験者は実験室に入室後、1回目の実験時には映画一般に関する質問紙（質問紙A）を受け取り、着席後これに回答を行った。1回目はこの回答後、2回目は入室後に実験者より次のような教示を受けた。今から映画をみてもらうこと、映画をみた後にそれについていくつかの質問に回答してもらおうこと、リラックスしてみてもらって構わないこと、眠らないで最後までみること、途中で何かある場合には隣室の実験者に知らせること、であった。教示後、実験者は映画の再生を開始し、隣室で待機した。映画が終了すると実験者は実験室に入室し、今みた映画について質問紙Bに回答を求めた。被験者がこれに回答した時点で1回分の実験を終了した。なお、2種類の映画をみせる順序についてはHNCとLNCの間でそれぞれカウンター・バランスをとった。

結 果

1. 認知欲求別にみた映画一般に関する評定

①映画館でみる頻度 4件法の評定を認知欲求別に集計した結果、「よくみる」あるいは「時々みる」に回答した被験者はHNCで35.3%、LNCで27.8%であった。一方、「ほとんどみない」あるいは「あまりみない」に回答した被験者はHNCで64.7%、LNCで72.2%で、 χ^2 検定の結果両者には有意な差はみられなかった（ $\chi^2(1)=0.23$, *n. s.*）。また年間にみる映画の本数についても認知欲求別に集計した。年間4本以上映画をみると回答した被験者は、HNCで35.3%、LNCで38.9%であり、 χ^2 検定の結果両者には有意な差はみられなかった（ $\chi^2(1)=0.05$, *n. s.*）。

②テレビやビデオでみる頻度 4件法の評定を認知欲求別に集計した結果、「よくみる」あるいは「時々みる」に回答した被験者はHNCで70.6%、LNCで72.2%であった。一方、「ほとんどみない」あるいは「あまりみない」に回答した被験者はHNCで29.4%、LNCで27.8%で、 χ^2 検定の結果両者には有意な差はみられなかった（ $\chi^2(1)=0.01$, *n. s.*）。また月間にみる映画の本数についても認知欲求別に集計した。月間4本以上映画をみると回答した被験者は、HNCで52.9%、LNCで38.9%であり、 χ^2 検定の結果両者には有意な差はみられなかった（ $\chi^2(1)=0.70$, *n. s.*）。

③好きな映画のジャンル 各ジャンルとも、認知欲求の違いによる好みの差はみられなかった。認知欲求に関わらず「活劇・冒険・スペクトル」が82.7%の被験者から好かれており、ついで「恋愛」が48.6%、「アニメーション」が40.0%、「SF X」が37.1%、「サスペンス・ホラー」が34.3%と続き、残りのジャンルは相対的に好まれる割合が低かった。

④映画に関する関心度 認知欲求別に関心度の平均値を求め、t検定によりその差を検討した。その結果、HNC（ $M=5.47$, $SD=1.01$ ）はLNC（ $M=4.61$, $SD=1.38$ ）よりも映画に対する関心度が高いことが示された（ $t(33)=2.10$, $p<.05$ ）。

⑤映画に関する知識度 認知欲求別に知識度の平均値を求め、t検定によりその差を検討した。その結果、HNC（ $M=2.76$, $SD=1.30$ ）とLNC（ $M=2.50$, $SD=1.15$ ）の間では映画に対する知識度に差がないことが示された（ $t(33)=0.53$, *n. s.*）。

⑥洋画・邦画の好み 「邦画」が好きだと回答した被験者はなく、認知欲求別に「洋画」と「どちらでもない」に回答した被験者を集計した。その結果、「洋画」と回答した被験者はHNCで64.7%、LNCで72.2%で、 χ^2 検定の結果両者には有意な差はみられなかった($\chi^2(1)=0.23, n. s.$)。

2. 認知欲求と映画刺激の複雑性別にみた提示された映画に関する評定

①映画刺激の操作の妥当性 映画刺激の操作の妥当性を検証するために、映画に対する理解度と難易度について、それぞれの刺激別に平均値を算出しt検定を行った。その結果、単純刺激は複雑刺激より理解しやすく ($M=5.29, SD=1.20$ vs. $M=2.74, SD=1.17$; $t(34)=7.62, p<.01$)、またよりやさしい ($M=3.00, SD=1.41$ vs. $M=5.57, SD=1.17$; $t(34)=10.98, p<.01$) と認知されていることが示された。従って、映画刺激の操作は妥当であったといえる。

②映画に対する印象 26形容詞対に対するSD評定に基づき、因子分析(主因子法・バリマック

Table 1. 映画の印象評定項目に関する因子分析の結果

形容詞対	F1	F2	F3
地味な-派手な	.87	-.18	.07
つまらない-おもしろい	.86	-.04	.17
静的-動的	.84	-.19	-.28
興奮的-沈静的	-.82	.21	.18
強い-弱い	-.81	.03	.16
すき-きらい	-.78	.12	-.36
明るい-暗い	.76	.53	-.14
陰気な-陽気な	.74	-.46	.14
たのしい-さびしい	.73	.50	-.11
まとまった-ばらばらな	-.70	.01	-.22
不健康な-健康な	.70	-.47	-.04
古い-新しい	.69	-.06	-.10
男性的-女性的	-.68	.34	-.08
冷たい-暖かい	.62	-.47	.03
美しい-みにくい	-.62	.13	-.32
鋭い-にぶい	-.59	-.55	.00
かたい-やわらかい	.58	-.42	.21
ゆるんだ-緊張した	.52	.34	-.33
重い-軽い	.42	-.76	.06
単純な-複雑な	-.13	.83	-.10
表面的-深みのある	.12	.72	-.03
子供の-大人の	-.24	.64	.28
神経質な-神経質でない	.42	-.58	.02
平凡な-個性的	.26	.53	-.26
感情的-理知的	-.05	.03	.73
安定した-不安定な	-.36	.17	-.62
固有値	10.09	4.89	1.76

Table 2. 認知欲求と映画刺激の複雑性別にみた平均値と標準偏差

従属変数	LNC n=18		HNC n=17	
	単純刺激	複雑刺激	単純刺激	複雑刺激
印象				
評価性	5.13(0.48)	3.09(0.50)	5.42(0.53)	3.39(0.68)
複雑性	4.05(0.65)	5.30(0.78)	3.92(0.89)	5.42(0.85)
安定性	3.81(0.96)	3.14(0.92)	4.09(0.94)	3.03(0.87)
認知努力	2.31(0.59)	2.33(0.80)	2.51(0.47)	3.06(0.54)
評価				
映像	5.26(0.58)	3.39(1.12)	5.57(0.96)	4.50(1.13)
音楽	5.43(0.92)	3.67(1.08)	6.15(0.68)	4.07(0.93)
認知反応	2.83(2.18)	3.28(2.30)	2.35(1.77)	3.41(2.35)

注) ()内の数値は標準偏差を示す。

ス解)を行った。その結果を示したのがTable. 1で、3因子を抽出した。第1因子は“おもしろい—つまらない”、“明るい—暗い”、“好き—嫌い”などに高負荷を示しており評価性次元、第2因子は“複雑な—単純な”、“深みのある—表面的”、“個性的—平凡な”などに高負荷を示しており複雑性次元、さらに第3次元は“安定した—不安定な”、“感情的—理知的”に高負荷を示しており安定性次元と解釈した。各次元に高負荷を示した項目 (Table. 1を参照) の平均評定値を因子得点として (負荷量の正負から評定値の方向を揃えた)、因子ごとに認知欲求と映画の種類別の平均因子得点を算出した (Table. 2を参照)。この平均得点に基づき、2 (認知欲求: HNC・LNC) × 2 (映画刺激の複雑性: 単純・複雑) の2要因分散分析を行った。映画刺激の複雑性は繰り返し要因であり、以下分散分析とはこのモデルのことを指す。

分散分析の結果、評価性次元では有意な認知欲求の主効果 ($F(1,33)=4.58, p<.05$) と映画刺激の複雑性の主効果 ($F(1,33)=250.89, p<.01$) が得られた。つまり、HNCの方がLNCよりもポジティブな評価を行っており ($M=4.40, SD=0.47$ vs. $M=4.11, SD=0.33$)、また単純刺激の方が複雑刺激よりも高い評価が与えられている ($M=5.27, SD=0.52$ vs. $M=3.24, SD=0.61$) ことが示された。一方、複雑性次元と安定性次元では、それぞれ映画刺激の複雑性の有意な主効果が得られた ($F(1,33)=60.85, p<.01$; $F(1,33)=13.97, p<.01$)。つまり、複雑刺激は単純刺激より複雑で ($M=5.36, SD=0.80$ vs. $M=3.99, SD=0.77$)、より不安定である ($M=3.09, SD=0.89$ vs. $M=3.94, SD=0.95$) と認知されていることが示された。

③認知努力 映画をみている時の思考に関して測定した3項目について因子分析 (主因子法) を行った。その結果、1因子構造と解釈できたので (説明率56.8%)、3項目の平均値を認知的な努力の程度を示す指標として用いることにした。この認知努力指標について認知欲求と映画刺激の複雑性別の平均値を算出し (Table. 2を参照)、これに基づき分散分析を行った。その結果、認知欲求の主効果 ($F(1,33)=8.19, p<.01$)、映画刺激の複雑性の主効果 ($F(1,33)=4.56, p<.05$) が有意であり、認知欲求×映画刺激の複雑性の交互作用に傾向もみられた ($F(1,33)=4.00, p<.06$)。つまり、HNCはLNCよりも認知努力の程度が高く ($M=2.78, SD=0.43$ vs. $M=2.32, SD=0.52$)、また複雑刺激には単純刺激より多くの認知努力が払われたことが示された ($M=2.69, SD=0.77$ vs. $M=2.41, SD=0.54$)。交互作用については傾向ながら、単純効果の検定を行った。Fig. 1.には、認

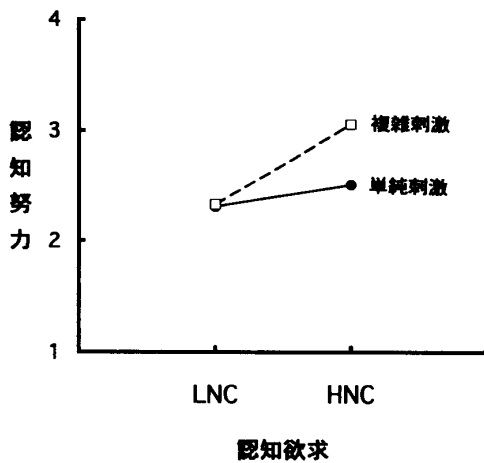


Fig. 1. 認知欲求と映画刺激の複雑性別にみた認知努力の平均評定値。

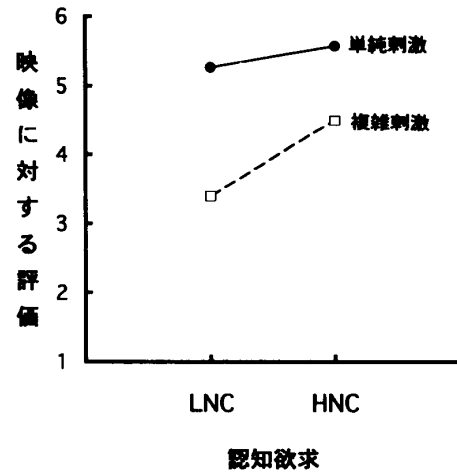


Fig. 2. 認知欲求と映画刺激の複雑性別にみた映像に対する評価の平均評定値。

知欲求と映画刺激の複雑性別にみた認知努力の平均評定値が示されている。Fig. 1.からも読みとれるように、認知努力は単純刺激に対してはHNCとLNCの間で変わらないが ($F(1,66)=0.92, n. s.$)、複雑刺激に対してはHNCはLNCよりも高い認知努力を払ったことが示された ($F(1,66)=12.26, p < .01$)。

④映画に対する認知反応 映画をみている時に思いついた考えを列挙させたが、認知欲求と映画刺激の複雑性別にその認知反応数の平均値を算出し (Table. 2を参照)、これに基づき分散分析を行った。その結果、映画刺激の複雑性の有意な主効果が得られ ($F(1,33)=9.96, p < .01$)、複雑刺激をみた時の方が単純刺激をみた時より多く認知反応を行うことが明らかになった ($M = 3.34, SD = 2.29$ vs. $M = 2.60, SD = 1.97$)。

⑤映像と音楽に対する評価 1) 映像 4形容詞対に対する評定値に基づき因子分析 (主因子法) を行った。その結果、1因子構造と解釈できたので (説明率75.1%)、4項目の平均値を映像に対する評価を示す指標とした。この映像に対する評価指標について認知欲求と映画刺激の複雑性別の平均値を算出し (Table. 2を参照)、これに基づき分散分析を行った。その結果、認知欲求の主効果 ($F(1,33)=6.99, p < .05$)、映画刺激の複雑性の主効果 ($F(1,33)=61.99, p < .01$)、認知欲求×映画刺激の複雑性の交互作用 ($F(1,33)=4.58, p < .05$) がいずれも有意であった。つまり、映像に対する評価はHNCの方がLNCよりも高く ($M = 5.04, SD = 0.91$ vs. $M = 4.33, SD = 0.67$)、また単純刺激の方が複雑刺激よりも高いことが示された ($M = 5.41, SD = 0.79$ vs. $M = 3.93, SD = 1.24$)。交互作用についてはさらに単純効果の検定を行った。Fig. 2には、認知欲求と映画刺激の複雑性別にみた映像に対する評価の平均評定値が示されている。Fig. 2からも明らかのように、映像に対する評価は単純刺激に対してはHNCとLNCの間で変わらないが ($F(1,66)=0.90, n. s.$)、複雑刺激に対してはHNCはLNCよりも高い評価を行ったことが示された ($F(1,66)=25.37, p < .01$)。

2) 音楽 同様に4形容詞対に対する評定値に基づき因子分析 (主因子法) を行った。その結果、1因子構造と解釈できたので (説明率79.8%)、4項目の平均値を音楽に対する評価を示す指標とした。この音楽に対する評価指標について認知欲求と映画刺激の複雑性別の平均値を算出し (Table. 2を参照)、これに基づき分散分析を行った。その結果、認知欲求の主効果と映画刺激の複雑性の主効果がともに有意であった ($F(1,33)=5.80, p < .05$; $F(1,33)=88.21, p < .01$)。つまり、映

像と同様に音楽に対する評価もHNCの方がLNCよりも高く ($M=5.11$, $SD=0.59$ vs. $M=4.54$, $SD=0.77$)、また単純刺激の方が複雑刺激よりも高いことが示された ($M=5.78$, $SD=0.88$ vs. $M=3.86$, $SD=1.02$)。

⑥過去の視聴経験 単純刺激の「レイダース」と複雑刺激の「ブリキの太鼓」のそれぞれについて、過去の視聴経験を認知欲求別に集計した。その結果、「レイダース」をみたと回答したものはHNCで52.4%、LNCで47.6%であったが、 χ^2 検定の結果、認知欲求が違うことで視聴経験に差のないことが示された ($\chi^2(1)=0.31$, *n. s.*)。また「ブリキの太鼓」をみたと回答したものは、HNCに1人いるだけでその他の人の視聴経験はなかった。

考 察

従来、認知欲求の妥当性を検証するための実験で、ある一定のルールに従い数字に丸をつけるという課題においては、HNCはLNCより複雑な課題を好み、LNCはHNCよりも単純な課題を好むことが示されていた (Cacioppo & Petty, 1982)。本研究はこうした作業課題だけではなく、映画刺激に対する評価という事態でも、認知欲求の違いが情報処理の程度に違いをもたらし、その評価にも違いをもたらすのかを検討するものであった。

情報処理の程度に関して言えば、認知欲求研究の多くは態度変容研究との関連で進められており、従来、HNCはLNCよりも説得的メッセージに対する情報処理の程度が高く、メッセージからの影響を受けやすいことが示されてきた (Petty & Cacioppo, 1986を参照)。しかし従来の態度変容研究では、説得的メッセージの難易度(複雑性)と情報処理の程度との関係を直接扱ったものは見あたらない。本研究では、芸術に対する評価が刺激の複雑性—単純性という次元によって影響を受けることから(例えば、Barron & Welsh, 1952)、映画刺激の複雑性を考慮し、認知欲求と映画刺激の複雑性が情報処理の程度に及ぼす効果について検討した。その結果、情報処理の程度は認知欲求だけでなく映画刺激の複雑性にも依存することが明らかになった。つまり、情報処理の程度を反映すると思われる認知努力の程度において、単純刺激に対してはHNCとLNCの間に差はないが、複雑刺激に対してはHNCはLNCよりも高い認知努力を払うことが示された。

映画刺激に対する評価に関しては、仮説の一部が部分的に支持された。つまり、映像に対する評価において、単純刺激に対してはHNCとLNCの間に差はないが、複雑刺激に対してはHNCはLNCよりもポジティブな評価を行った。この結果は情報処理の程度を反映する結果であり、複雑な映画刺激をみたときにHNCはLNCよりも情報処理の程度が高く、映像に対する評価がよりポジティブになったと考えられる。

一方、単純刺激に対しては予測されたような結果が得られなかったが、これは映画刺激の刺激特性によると思われる。本実験では、単純刺激として「レイダース」を複雑刺激として「ブリキの太鼓」を用いたが、どの評価側面においても「レイダース」は「ブリキの太鼓」よりもポジティブな評価を得た。映画刺激の中には、音楽的、演劇的、物語的、絵画的といった様々な要素が含まれており、単純刺激である「レイダース」では認知欲求の影響以上に、ポジティブな評定を生じさせる要素が多く含まれていたと予測される。

さらに、こうした結果は被験者の映画の見方に対する成熟度とも関連しているかもしれない。本実験に参加した被験者は、大学1年生であり年齢が若く、実際に映画に対する接触度や知識度も高くなかった。従って、映画の見方に関する成熟度という点では全体的に低い被験者であったといえる。藤原(1989)が指摘しているように、成熟するにつれて単純な映画から複雑な映画へと嗜好が

変化するのだとすれば、本実験に参加した被験者は成熟度が低かったために、一様に単純刺激に対してポジティブな評価を与えたのかもしれない。

また、映画に対する印象の評価性次元や音楽と映像に対する評価においては、HNCはLNCよりもポジティブな評価を行うという認知欲求の主効果が得られた。こうした結果は、認知欲求の違いによって映画一般に関する関心度が違うことと関連しているかもしれない。つまり、HNCはLNCより映画に関する関心度が高いため、映画に対して好意的な態度を保持しており、それがポジティブな評価につながったと推測される。このことに関しては推測の域を越えないため、さらに検討する必要がある。

本実験では、映画刺激の単純性－複雑性という次元にしたがって選定した「レイダース」と「ブリキの太鼓」の過去の視聴経験に違いがみられた。つまり、「レイダース」は認知欲求の違いによらず約半数の被験者に視聴経験がある刺激であったのに対して、「ブリキの太鼓」は一人を除いて全員の被験者に視聴経験がない刺激であった。映画刺激の単純性－複雑性の違い以外にこうした視聴経験の違いが、本実験で得られた結果に影響を及ぼしていた可能性がある。そこで、「レイダース」の視聴経験有無別に映画に対する印象の各因子得点、映像および音楽に対する評価、認知努力、認知反応の平均値を比較した。t検定の結果、どの従属変数においても視聴経験の有無による差は認められず、「レイダース」に対して行われた評価には視聴経験の差が反映されていないことが示された。つまり、映画刺激の違いによる評価の違いは映画刺激の単純性－複雑性の次元を反映したといえよう。

最後に、映画一般に関する評定に関して、HNCの方がLNCよりも映画に対する関心度が高いという他には、映画に対する接触度、知識度、好きなジャンルなどに認知欲求の違いによる差はみられなかった。先にも述べたように映画には、音楽的、演劇的、物語的、絵画的といった様々な要素が含まれている。従って、映画に対する嗜好は情報処理の個人差と関わる認知欲求だけで決定されるのではなく、他の様々な内的および外的要因によって複合的に決定されると考えられる。

文 献

- Barron, F. & Welsh, G. S. (1952) : Artistic perception as a possible factor in personality style : Its measurement by a figure preference test. *The Journal of Personality*, 33, 99-203.
- Cacioppo, J. T. & Petty, R. E. (1982) : The need for cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42(1), 116-131.
- Eysenck, H. J. (1941a) : The general factor in aesthetic judgements. *British Journal of Psychology*, 31, 94-102.
- Eysenck, H. J. (1941b) : 'Type'-factors in aesthetic judgements. *British Journal of Psychology*, 31, 262-270.
- Eysenck, H. J. (1941c) : The empirical determination of an aesthetic formula. *Psychological Review*, 48, 83-92.
- 藤原武弘 (1989) : シネマ・サイコ. 福村出版.
- 藤原武弘・田頭伸子 (1984) : クラシック音楽の認知への多次元尺度法的アプローチ 心理学研究, 55, 75-79.
- 神山貴弥・藤原武弘 (1991) : 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, 6(3), 184-192.
- Monaco, J. (1981) : *How to read a film: The art, technology, language, history, and theory of film*

- and media*. New York : Oxford University Press. (岩本憲児・内山一樹・杉山昭夫・宮本高晴(訳)1983. 映画の教科書. フィルムアート社)
- Munsinger, H. & Kessen, W. (1964) : Uncertainty, structure, and preference. *Psychological Monographs*, 78(9) (Whole No. 586.)
- O'Hare, D. (1976) : Individual differences in perceived similarity and preference for visual art : A multidimensional scaling analysis. *Perception and Psychophysics*, 20, 445-452.
- Petty, R. E. & Cacioppo, J. T. (1986) : *Communication and persuasion : Central and peripheral routes to attitude change*. New York: Springer-Verlag.
- Springbett, B. M. (1960) : The semantic differential and meaning in non-objective art. *Perceptual and Motor Skills*, 10, 231-240.